翌日の帰途、車掌に

「松喰虫には、何か手を打っていますか」と尋ねて及た。

「別にしている様子はありません。とくに今年になってひどくなったようです」と言う。

私は、白砂青松の文字に×印をしたくなるような気持で国民宿舎を後にした。車の中で、しばらく、佐伯の松、大分の松を思い浮かべていた。

頼山陽の詩に「松」と題した絶句がある。

歳年養就老竜鱗
深壑特為一吟
免得庸工加刻削
万層雪底歳寒心

長い間かかって育てた老松は、深い谷間にあって、特別竜が一吟でもするように大声を発するのである。これも要するところ技術の拙い木工に刻み削られることをまぬかれ、その上、幾層も雪の底に埋もれて寒い冬の季節に堪える心を忘れなかったからである。

（深田光要訳）

先人は、崇敬のシンボルとして松を詠み、松を子孫に残してくれた。

現代人は、無惨に消えゆく松に、慨嘆の詩しか残さずに、手を拱ぬいているとは、何とその罪重く、淋しい限りではなかろうか。

（NHK「くらしのたより」投稿原稿・放送済）

---

## 山田俊卿伝

郷土の週刊新聞の一つ「鶴谷産報」に、井上程次郎先生が書かれていた「矢野文雄先生伝」は、連載百三十回、去る十月十四日に終った。資料の蒐集、整理もさることながら、当時の世情と龍渓の人物についての論述と批評の手腕には感服の外はない。

引つづき今度は「山田俊卿伝」を書かれて第三回になる。山田俊卿先生は米水津村宮ノ浦に生まれ、医学を修めて身を軍籍におき大成された方、そして心学和性の道を聞いて有名である。御期待申し上げよう。（H）

---

研究

# 佐伯と国木田独歩（五）

## ―そのころの毛利家―

山本保

「歌かざるの記」の一部を掲げます。

明治二十六年十月二日

午前中㊀中根氏を訪ふ不在、蓋し氏と共に㊁毛利氏を訪はんとてなり。㊂坂本永年氏来る。午後三時鶴谷学館に行き幹事の諸氏と学課の事に就き相談する所あり。

註 ㊀中根氏―中根淑氏、毛利家総取締役、当時今の馬場区居住。
㊁毛利氏―旧佐伯藩主 毛利高泰、鶴谷学館経営主、当時審露館（今の大手区建設）に居住していました。
㊂坂本永年―鶴谷学館長、山手通り、後独歩が下宿したが佐伯赴任当初及帰島の日本旅館であった。
㊃今の中央区新屋敷にあった。

九月三十日鶴谷学館教師として佐伯へ赴任した独歩は、十月二日挨拶をかねて毛利邸を訪問しています。

同十一月三日

天長節にして学校は休みなり。

午前收二と共に女島の野らに散歩す。日暖かにして小春の季節なり。

午後四時より審露館に出席す。毛利氏の邸に開か

れしものなり。立食の饗応あり。土地の上級人士の集会なり。五六十名を超ゆ。

立食の饗応とは、当時としては珍らしい、モダンなパーティだったと想像されます。洋行（フランス）帰りか毛利子爵の好みがうかがわれます。

「独歩が一年足らず教鞭をとった鶴谷学館というのは、佐伯に中学校がないので、高等小学校卒業の子弟のために、毛利家（高範子爵）でやらせた小さい塾みたいなものであった」と故中根貞彦氏が語っています。

明治二十七年一月十四日

旧藩主毛利公、経営主任中根祚亮、幹事日置泉寺を歴訪。

鶴谷学館の冬休みで、山口県柳井町に帰省した独歩氏、一月十三日佐伯に帰任し、翌十四日毛利高範邸へ帰任挨拶のため参上しました。

富永徳磨（鶴谷学館生徒）の日記より。

明治二十七年一月十二日

本日は鶴谷学館開業式の行るべき筈なりと思ひつきたれば、三時頃出で行きぬ。

毛利公を始め銀行会社の役員等は已に在るも、生徒の集り甚だ少くして幹事の心配憐れに思ふれば、我、華師寺を伴ひ来りて更に校に入りしは、式已に始まりて公演説の最中なりき。

公の演説終れば……

鶴谷学館の始業式には、毛利高範子爵の演説が式順に織り込まれていたことがうかがわれます。

式後、毛利家の支出によって、生徒を饗応するのがしきたりでうどん、猪飯、饅頭、紅白餅、しる粉等の御馳走が出されました。なかでも、うどんは当時「しげうどん」という大阪流の名物うどんで、生徒間にたいへん人気があったそうです。

佐伯小学校校長室に一つの額が掲げられています。毛利高範の若き日の写真に、一文が添えられています。文章は左の通りです。

乾綱後古而して庠序学校の設、盛矣。

南豊佐伯の士民柳謀、明治六年を以て小学を旧城の下に興す。

時、廃藩之余制に属し、産其の道を得ず、士民食に艱久、数年の後校費屢空し。

鴻山毛利公之を聞き、慨然として曰く、佐伯我が家と為し、旧封今斯の如し。

我何を以てか上朝廷に答え、下祖宗に見えんや。乃ち今を与え、謀を扶け、捐金数千円以て其の費を助く。公特命して十四宗、明治十二年也。

是に於て良師聘す可く、校舎修す可く、貧家の子弟亦以て就学す可き矣。

開者佐伯士民公の恩照を請うて、将に諸校中に揚げ、永く其の志を紀せんとす。

嗚呼、公や能く皇化を翼賛し、祖徳を紹述したるものと謂う可し。而して士民之を識れざる可し。其の誰何ぞ厚き。

学務委員某某等書を寄せ、余に記を徴す。乃ち為して其の要此の如し。（良文は漢文）

明治十七年三月十八日

正六位勲五等　秋月　新撰並書

法　㋑　乾綱（天子の大権）
㋺　序序（国令）
㋩　燕（日が出てまだ明らかでないさま）
㋥　海山毛利公（高範）
㋭　稍金（えんきん、公費の為の寄付金）
㋬　時季（ときに）　㋣　聞者（近頃）
㋠　小祠（肖像）
㋡　紹述（先輩のあとを上ぐうけついで、いっそうはつきりさせる。）
㋢　学務委員某某（坂本永年寺）

明治六年、三の丸御殿に佐伯小学校が開校されましたが、開校まもなく財政難に落ち入り、最悪の事態を迎えました。

窮状を見かねて、高範子爵は学校に私財壱千円を出資されました。実に明治十二年の頃です。

その徳をたたえたのが右の一文です。この額は学制百年記念にふさわしい、貴重な文化財の一つといっても過言ではありません。

（附記）これで私の執筆「佐伯と国木田独歩」を終りますが、余白の都合から前記毛利高範子爵が題額等御執筆の記念碑などを御紹介しましょう。

○日清役戦死者高野金作君の碑（菊岡海福寺）
○城山遺跡之碑（三の丸上段）
○鶴岡村忠魂碑（佐伯市勝尾、聖山）
○樹村円治氏尊像建設記念碑（上浦、津井公園）
○神崎六平彰徳碑（鶴見町耳賀浦）
○天満神社鳥居（弥生町長岩、天満神社）

元藩主と佐伯の人々との結びつきが、いかに深かったかがうかがわれます。

（終）

随想

## 思い出の糸をくる

―大正初期の夏祭『つくりもん』―

会員　佐脇貫一

明治・大正・昭和のはじめにかけて、佐伯地方の名物であった内町神明祭、船頭町住吉祭の神賑い行事である『つくりもん』や見立細工は、郷土人の忘れることのできない思い出の一つである。

内町は旧暦の六月十四、十五の両日、船頭町は『おんばらい』の深刻き計算に入れて、だいたい六月の二十九、三十日を祭日にした。

大正五、六年ごろ、内町の神明社は五所明神社内に移祀されていたので、祭事は五所明神社で、『つくりもん』や見立細工は内町全町をあげて賑わった。船頭町の住吉祭は番匠河畔鳩ヶ鼻にその社祠があるため、祭事のすべてが神社で行なわれた。鳩ヶ鼻の石堤をめぐって内町に通じる住吉川、それはドブ川であったけれど、宵闇はその魅をかくして、川岸の桜樹などにつるされた献燈が祭情緒を浮き立てた。

内町に生まれ、三十年の歳月をこの土地の商家に送った筆者は、いま往時を回想して名物祭のおもかげをしのんでいる。そして手許にある大正三年八月発行の、佐伯自治新聞（所南卓発行佐伯新聞の前身）にかせられた、内町夏祭の見立細工『つくりもん』の記事に、幼い日の思い出を追っている。記事は〻待ちかまえていた内町の見立細工〻として、その出来栄えを絶賛している。